

特別展

小川晴暘と飛鳥園

100年の旅

Ogawa Seiyo and Askaen, a Centennial Journey



小川晴暘「新薬師寺 十二神将・伐折羅大将像」 飛鳥園蔵 ©Askaen

2024年4月20日(土)－6月23日(日)

レンズを通して見つめ続けた、人々の祈り。その100年の歩み。

展覧会の趣旨

奈良を中心に各地の仏像を撮った写真家・小川晴暘（おがわ・せいよう 1894-1960）。彼が創立した仏像撮影専門の写真館・「飛鳥園」は2022年に創立100年を迎えました。

兵庫県姫路市に生まれた小川晴暘は、画家を志して上京しますが、奈良で仏像などの文化遺産に感銘を受けたのを機に写真に傾注するようになります。1922年、美術史家・書家・歌人として知られる會津八一の勧めで奈良に「飛鳥園」を創業し、奈良の仏像や寺院を中心に文化財・文化遺産の撮影に精力を傾けました。撮影だけでなく東洋美術の研究にも熱中し、奈良に居を移した志賀直哉や京都大学総長も務めた濱田青陵をはじめ、文化人・知識人との交流も深めました。さらに日本のみならず、中国の雲岡石窟、韓国の石窟庵、仏国寺、インドネシアのボロブドゥール遺跡、カンボジアのアンコール・ワットなど、アジアの文化遺産の調査・撮影も積極的に行いました。小川晴暘の写真は、常識を覆す大胆な発想と画才にも恵まれたことでも分かる美への強いこだわりと感性によって、仏像を主題に神秘的な写真空間を生み出すことに成功し、文化財の記録・資料という枠を超えて、仏像写真を芸術の域にまで昇華させた画期的なものでした。小川晴暘は1960年に逝去しますが、写真館飛鳥園の活動は小川光三、小川光太郎へと引き継がれ、その活動は現在も奈良の地で続いています。

本展は、小川晴暘・光三親子の写真作品を中心に、文化財保護活動を支えると同時に仏像写真を芸術の域に高めた飛鳥園の活動を振り返ります。飛鳥園に保存されている写真に加え、小川晴暘が調査の際に遺したスケッチや拓本、晴暘が発刊した『仏教美術』などの古美術研究専門誌や文献資料もあわせ、古美術・文化遺産を愛した小川晴暘という人物の姿にも迫ります。また、現在も活動を続ける飛鳥園が近年撮った写真もまじえ、飛鳥園という「眼」がレンズを通して切り取った100年のまなざしを感じていただく展覧会です。

出品件数

約110件（出品件数の合計）

展示構成（予定）

- 序章 飛鳥園 旅のはじまり
第1章 小川晴暘と飛鳥園
第2章 小川晴暘とアジアの仏教美術
第3章 小川晴暘から小川光三へ
第4章 飛鳥園100年の旅 志を継いで

本展のみどころ

1. 小川晴暘が興した、仏像写真館・飛鳥園の100年を超えるその歩みを紹介
姫路に生まれ、写真を学びつつも画家を志して上京していた小川晴暘が、奈良の仏像や

文化遺産に魅せられて関西に戻り、写真の道を歩む事となり、會津八一との出会いから始まった飛鳥園の歴史。晴暘から光三を経て、現代まで 100 年を超えて続くその活動は、歴史的文化財の記録、学術的資料という枠を超えて、信仰の対象である仏教美術の本質をレンズ越しに捉え、美術的写真表現の魅力と完成度を併せ持った写真として表現し続けてきた飛鳥園の活動を紹介します。

2. 小川晴暘の旺盛な活動を再考

その経歴からも明らかなように、小川晴暘は写真以外にも絵画、スケッチ、拓本、日記など様々な記録と表現でその活動を残している。また、その活躍の範囲も日本を超えて中国、朝鮮半島、アジアの各地域へと広がる旺盛なものであった。残された膨大な記録や出版物などの資料から、晴暘の活動が果たした功績について展観します。

3. 晴暘から光三、そして現在も続く飛鳥園の魅力

晴暘から飛鳥園を託された光三、そして現在飛鳥園で写真撮影を担当する若松保広の写真を通して、飛鳥園が創業以来伝え続けている、古都奈良を中心に、仏像が語る日本の精神文化の記録と伝達、その魅力を紹介します。

▼展覧会の基本情報と来館案内

主催・会場	奈良県立美術館 毎日新聞社 〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 10-6 TEL 0742-23-3968/FAX 0742-22-7032/テレホンサービス 0742-23-1700 美術館公式ホームページ https://www.pref.nara.jp/11842.htm
会期	2024 年 4 月 20 日(土) - 6 月 23 日(日)
特別協力	飛鳥園
後援(予定)	奈良テレビ放送株式会社、株式会社奈良新聞社、西日本旅客鉄道株式会社、近畿日本鉄道株式会社、奈良交通株式会社、公益社団法人奈良市観光協会
開館時間 休館日	9 時～17 時(入館は閉館の 30 分前まで) 毎週月曜日 (ただし 4 月 29 日、5 月 6 日は開館、4 月 30 日(火)、5 月 7 日(火)は休館)
観覧料(予定)	一般=1,200(1,000)円、大・高生=1,000(800)円、中・小生=800(600)円 ※()内は団体料金(20人以上)
交通案内	近鉄・奈良駅 1 番出口から奈良公園に向かって徒歩 5 分 JR・奈良駅 東口バス乗り場から奈良交通バスにて 5 分「県庁前」下車 100 メートル

▼同時開催または会期中の催し

会期中の催し(予定) (当館主催事業)	◆トークセッション「飛鳥園カメラマン若松保広氏に聞く仏像撮影」 講師：若松保広氏(カメラマン) 聞き手：当館学芸員 日時：5 月 3 日(金・祝) 14 時～(13 時 30 分開場・約 90 分) 場所：当館 1F レクチャールーム(60 席) ※事前申込制、先着順。
------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

◆講演会「會津八一と小川晴暘」

講師：湯浅健次郎（新潟市會津八一記念館 学芸員）

日時：6月16日（日）14時～（13時30分開場・約90分）

場所：当館1Fレクチャールーム（60席）

※事前申込制、応募者多数の場合、抽選制

◆当館学芸員によるギャラリートーク

日時：4月27日、5月18日、6月1日（いずれも土曜日）14時～・展示室にて

※上記イベントへの参加には当日の観覧券が必要です。

※新型コロナウイルス感染拡大防止にご協力をお願いいたします。

ギャラリー展示
（1Fギャラリー）

※入場無料

※詳細は追って美術館公式ホームページ等で紹介します

取材のご依頼

広報に関するお問い合わせ

奈良県立美術館（展覧会企画担当：主任学芸員 深谷聡、学芸員 三浦敬任）

〒630-8213 奈良市登大路町10-6

TEL 0742-23-3968 FAX 0742-22-7032

広報用画像リスト

◇展覧会広報用に下記の画像を用意しております。ご希望の画像の番号（1～5）をお知らせください。

◇必ず下記のキャプション・著作権表記もご掲載ください。

ただし、ルビ（ふりがな）を付ける・付けないの判断と西暦・和暦の選択は各メディアに委ねます。

◇掲載にあたり作品部分のトリミング、文字載せはご遠慮ください。

No.	画像	キャプション	概要
1		小川晴暘 「新薬師寺金堂 十二神将・伐折羅大将像」 (しんやくしじこんどう じゅうにしんし ょう ばさらたいしょうぞう) 飛鳥園蔵 ©Askaen.inc	顔の正面から光を当て、大きく見開く目、 今にも声を発しそうな口、深く刻まれた 眉間のしわを陰影で描写する小川晴暘の 代表作。
2		小川晴暘 「東大寺法華堂 伝月光菩薩像」 (とうだいじほっけどう でんがっこうぼさ つぞう ぶぶん) 飛鳥園蔵 ©Askaen.inc	伝月光菩薩像は胸前で合掌する静かな像 の優美さが際だった顔貌を捉えた作品。 撮影は大正末年頃とされ、その頃には晴 暘の写真は奈良のみならず、全国の美術 愛好家や研究家に知れ渡っていた。
3		小川光三 「東大寺法華堂 不空羂索観音像 と天蓋」 (とうだいじほっけどう ふくうけんさく かんのんぞうとてんがい) 飛鳥園蔵 ©Askaen.inc	東大寺法華堂の不空羂索観音像とその 頭上に設置された天蓋を同時に画面に収 めた小川光三の作品。晴暘も苦心した法 華堂の不空羂索観音像の撮影に、大胆な 構図で、光をテーマに空間を巧みに捉え ている。
4		小川光三 「聖林寺 十一面観音像 左頭部 側面」 (しょうりんじ じゅういちめんかんのん ぞう ひだりとうぶそくめん) 飛鳥園蔵 ©Askaen.inc	数々の仏像と向き合ってきた小川光三 が「私の最も好きな観音像である」と述べる 聖林寺の十一面観音像。光三はあらゆる 角度から丹念に本像の魅力を捉え、写 真の中に写し出そうとする並々ならぬ意 欲を感じさせ、造形の真髄を探っている かのようでもある。
5		「飛鳥園前」 (あすかえんまえ) 飛鳥園蔵 ©Askaen.inc	建物は変わったが、今と同じ場所に構 える飛鳥園の前で行われたデモンストレ ーションの写真